



社内にて、立体式歩行リフトを用いたトイレ介助に必要な寸法を検証

私が障害者施設の設計の機会を得たのは10年程前にかかってきた1本の電話でした。ゆう建築設計はこれまで医療と福祉が専門の設計事務所であり、かつ透析、精神科、特養など、いくつかの部門においては日本の建築設計をリードしていました。私たちの建築に取り組む姿勢や、設計した建物の様子はホームページに掲載し、関連する雑誌に多くの記事を書き、書籍も出版していました。

そのようなものを見られたのだと思いますが、京都の福知山学園・松本理事長から、突然、既存入所施設のトイレ改修ができるかという問い合わせをいただきました。障害者施設の建築は経験がありませんでしたが、現地に行き、トイレを使われる様子や、支援員の動きを終日見ることから始めました。夜間のトイレ状況を見るために泊まり込みもしました。

おしっこを壁にかけられる人がいたり、水に興味を持つ子がいたり、それまで考えたこともないことが多くありました。また失便ということも初めて知りました。居室などでの失便への対応、トイレに移動してズボンを取らせてか

らの対応、床に落ちた柔らかい便を支援員さんが便器に運ぶ様子も見ました。私は建築でできることをやろう、使えるものがなければ自分で工夫しようと思い、床に落ちた便を水で流すことができる失便処理装置を作りました。模型を作って、「みそ」を便代わりにし、どうすればスムーズに流すことができるか実験を繰り返しました。作り上げた失便装置は改良を加えながら多くの物件で採用しています。

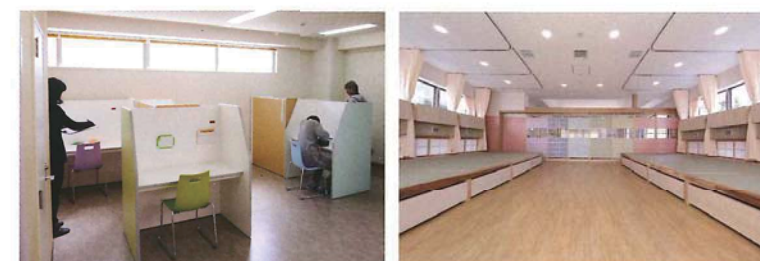
ここから私の障害者施設の設計がスタートしました。福知山学園のもと翠光園の建て替えでは、障害者施設の建築に必要なディテールや材料の検討を幅広く行いました。松本理事長は失敗してもよいから、利用者のためになることはすべてやってみようというお考えで、建具や壁の壊れにくさを整理するため、実物大で模型の壁を作って破壊実験を行った時は、実際に二人で壁にぶつかってみました。仕上げや材料だけではなく、利用者の特性に合わせたプランも様々な検討を重ねました。

強度行動障害ユニットのワークルームでは、作業に集中できるよう、囲まれた雰囲気を作るワークテーブルを作りました。竣工後数ヶ月掛かりましたが、机のレイアウトを何度も変えることによって、落ち着いて作業ができるようになりました。数ヶ月後の状況も調査を行いました。これら一連の設計でわかったことは、「障害者の特性は一人ひとり違う」「支援の方法も一人ひとり違う」「支援に対する考え方は法人によって違う」ということです。障害者の個人の家を設計するのであれば、その方の特性、支援方法に合わせた家を設計するのですが、グループホームや入所施設、また通所施設でも、異なる特性の方が一緒に過ごすことが前提です。個人々の違いがある中で、建築は対応を一つの方法でしか出せません。建築というハードと支援というソフトが協調してその施設の考え方に合った建物を作ることになります。

障害者施設の設計を始めたころは、利用者の特性に合わせることを一所懸命考えていました。ところがある時、建築を工夫することは、支援の方の手助けになることが多くあるのではないかと気が付きました。失便処理装置は、部屋を清潔に保ちやすく、利用者にとっても良いものですが、それ以上に支援員の負担を減らし、余裕が出た時間を他の支援に充てることができるようになります。そうだ、建築を一所懸命考えて設計することは、「支援をしている」ことだと思ったのです。この時から「建築も

支援の一つ」という言葉はゆう建築設計の各担当者、利用者や支援員と向き合う時の思いとなりました。

右の写真は最近の設計例の一つで、重症心身障害の方が日中を過ごす場所です。生活介護利用者8名のうち6名は全介助で、活動の時はリクライニング車いすに乗り、それ以外の時間は畳で寝た状態です。寝たきりの状態で外の光の変化、風を感じられることを考えています。畳スペースでは休養、マッサージのほかにおむつ交換も行います。プライバシーの確保、臭いへの対応、取り出しやすい収納など、支援内容に応じた工夫をしています。



強度行動障害ユニットワークルーム

重症心身障害者の日中過ごす場所

さらに障害者施設の設計は進んでいきます。高齢者や障害者の住まいは、利用者の暮らしやすさを建築から追求してきましたが、この数年、私は介護者・支援員の物理的・心理的な働きやすさも考えて設計を行っています。重度障害者の住まいでは特に見守りが大事になります。夜間の見守りは担当者に緊張をもたらします。センサーなどの機器の導入を検討する施設も増えていきます。二層に分かれた入所施設で上下階のスタッフルームを屋内階段と吹き抜けでつなぐ建物が計画中です。今後この視点から設計された建物が増えてきます。

建築の設計は利用者を考えて行います。障害があってもなくても、その方に合った建物を作るのは同じです。常に自分たちの持っている能力と知識を最大限に発揮し、限りない情熱で立ち向かうこと、それが「建築からの支援」です。ゆう建築設計の考え方や事例はゆう設計ホームページ(<http://www.eusekkei.co.jp/>)でご覧ください。

profile

砂山憲一(すなやま けんいち)
医療・福祉専門設計事務所。障害者施設の建築も多く手掛ける。
毎年障害者施設の事業者、支援者向けの建築セミナーを開催。
著書「高齢者の住まい事業 企画の手引き」学芸出版社
「高齢者住宅・施設の建築デザイン戦略」日本医療企画
「知的障害者施設の計画と改修の手引き」学芸出版社

であい

建築も支援の一つ



株式会社ゆう建築設計
代表取締役

砂山憲一